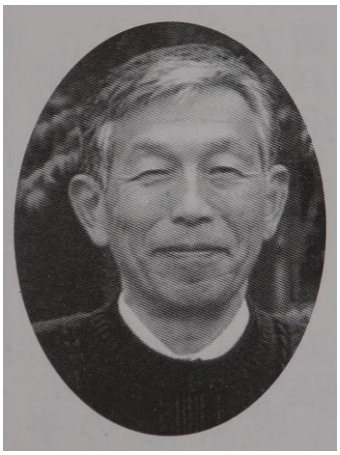
ラ　ジ　オ　は　い　い　と　も (※1)

高普第 13 回卒　村 山　正之 (※2)



「打ちました。大きい、大きい、センターバック、バック、バック。入りました。ホームラン」楽しかった。ラジオは、片思いのあの娘の次に好きだった。

志村正順アナの端正で流れるような実況放送から、投球フォームが、打球の行方が、塁上を走る様子が、手に取るように脳裏をかけめぐった。
「なんと申しましょうか」という小西得郎の明るい独特な抑揚の名解説もまた心待ちに聴いていた。

相高３年の秋、1960 年の日本シリーズは大洋ホエールズ対大毎オリオンズだった。私は小学生の頃からみんなには人気がないパ・リーグのオリオンズファンだった。３番ファースト榎本、４番レフト山内、５番センター田宮と首位打者、ホームラン王が連なる強力打線だった。が、万年最下位だった大洋が、新監督三原を迎えリーグ優勝ばかりかシリーズの覇権も握ってしまった。
微睡む午後、教室の後ろで、右手で頬杖をついて、授業を受けているイガグリ頭がいた。幾分ぎこちない風情が何とも青春だ。机の中から学生服の袖を通し、耳にイヤホンがつながっている。トランジスタラジオは相馬では珍しかった。日本シリーズの途中経過が周りにサインで伝えられた。
新しい時代がきたと感じた。

「金の鳥かごに雀」といわれた雀たちは、前の道を通る相女生を屋上から眺めつつ両の手を金網にかけ、檻の中の類人猿のごとくむやみに揺する。果てしない夢に向かっていた我ら雀たちに金の鳥かごは実に相応しかったと今改めて思う。雀は慕情である。そして切望である。

その頃５球スーパーラジオで平尾昌晃の甘っぽい「僕のかわいいミヨちゃんは色が白くて･･･前髪たらした･･･」スリーキャッツの色っぽい「若い娘は（うっふーん）お色気ありそで･･･黄色いサクランボ」など口ずさみ、淡き夢をみて一人ときめいていた。

病院のベッドの２年間も、枕元に付属のイヤホンで青き心を癒され続けた。ある日、ひと味違う色彩の魅力的は声姿が耳に残った。人生と愛を絞り出すように迸るように歌い上げていた。「愛の賛歌」、ピアフだった。去年、映画「エディット・ピアフ」を観た。この愛称「ピアフ」は「雀」のことだという。そうか。雀は情熱なのだ、そして魂なのだ。

あれから40年いや50年、なぜか目覚めが早くなった。小鳥たちのにぎやかな朝の挨拶に合わせラジオのスイッチを押す。ＮＨＫ「ラジオ深夜便」午前４時台「こころの時代」だ。いろいろな人生が、控えめでほどよい聞き手との語らいの中から生まれて出てくる。目から鱗の話に世界が広がる、心が洗われる言葉が胸に響く。

人は、母の胎内にいるときから、周りの音をちゃんと聴いているのだという。スピーカーから流れ出る不意の言葉や音に、ハートがズンと震える瞬間が堪えられない。言霊である。情である。ラジオは深いのだ。

イガグリ頭の雀たちも、今や白髪まじり、時には薄く、光も放つ。まなこの焦点距離は些か遠くなった。されど、困ったもので、心は歳をとらないようだ。気持ちはあのときのまま、雀たちはいまだ不滅である。

今日も自由な夢の徘徊と目覚めの現実が交錯する。ラジオとともに新しい朝が始まる。ミミで聴ける幸せを思う。
もっと愛モア、もっとユーモアー。

（※１）創立110周年記念誌『紅の旗』〈2009（平成21）年１月発行〉　「思い出の記」〈ああ、我らが青春の日々よ〉より
（※２）昭和36（1961）年卒、駒ケ嶺出身。